

革新を続けるSFC、そして岡部研究会も健在

岡部研究会の卒業生、および現在履修中の皆さんへ。

慶應義塾大学・湘南藤沢キャンパスにおける「岡部研究会」歴代メンバー名簿の最新版が完成したので、ここにお届けします。この名簿は、現在までに岡部研究会に一学期間またはそれ以上正規に在籍して単位を取得した諸君の名前を卒業年次を基準にリストしたものです。この名簿は一九九七年に初めて作成され、その後、毎年改定および追加を行ってきており、今回は第四号にあたります。今回の改定作業を行う上では、四年生の片桐新之介君の協力を得ました。以下、SFC、岡部研究会、そして私自身の近況をお伝えしましょう。

SFC「バージョン二・〇」

SFCは、創立されてから今年で満一〇年を経過しました。SFCを巡る地理的、社会的環境はずいぶん変わりました。そうした状況下、ひとことでいえばSFC自身も新たな飛躍をしようとしています。

まず、SFCへの玄関口ともいえる湘南台駅の周辺が、ここ五、六年で見違えるような風景になっています。まず湘南台駅には、駅には、相鉄線と地下鉄の二つの路線が昨年新たに乗り入れを実現し、これにより湘南台から横浜まで直通で行けるようになりました。また、今月からは小田急線の急行が停車するようになりました。そしてこの駅の周辺には数多くの新しいビルが建ち、書店やレストランなども次第に揃ってきました（駅ビル内にはスターバックス・コーヒーが、またSFC行バス停の近くにはマクドナルドが出てきています）。駅前に立てば、こうした変化の大きさに驚かれることでしょう。

また、SFCキャンパスの風景も、次第に変化しています。研究・教室棟の西側の小高い敷地（従来の研究室から道をはさんだ土手の上）には、ハイテク・リサーチセンターというモダンな研究所が設立されました。一方、テニスコート周辺の森の中には、山小屋（コテージ）スタイルのユニークな研究棟が5棟建てられました。これらの新しい建物は、単に建築物として斬新であるだけでなく、研究活動のスタイルやコンセプトとしても新時代にふさわしいものが盛り込まれています。さらに、来年（二〇一一年）4月には、SFC第三番目の学部として「看護医療学部」が開設されることになっておりその校舎の建設がいま着々と進められています（この新学部は、SFCバス駐車場から道路をはさんで北側にある「健康の森」の中に位置します）。

この間、SFC行きバスの終点からキャンパスに上ってくるタロー坂の木々の紅葉は、以前と変わらない美しさをみせています。また、鴨池（ガリバー池）の鴨たちも、30-40羽が引き続き健在です。

ところで、一〇年前には総合政策学部、環境情報学部という名称はSFC以外にはありませんでしたが、その後は類似の名称を持った学部が他大学にも相次いで創設されています。こうしたなかで、SFCの独自性はともすれば薄れかねませんが、SFCはさらに一歩前進し、いまや新しい段階に入りました。つまり「SFCバージョン二・〇」というわけです。それは、教育カリキュラムの抜本的改正（来年四月実施）

に象徴されています。

具体的には、大学において研究と教育の一体化を実現するとともに、学生の専門性強化を図るため、両学部で合計十五の「クラスター」（研究領域）が設定されます。例えば、総合政策系では、パブリック・ポリシー、組織ガバナンス、金融評価工学、ワールド・エコノミー、グローバル・ガバナンスの五つです。環境情報系でもインフォメーションテクノロジーなど五つ、複合系でも地球環境などの五つ、そしてSFC両学部全体としては合計十五です。これに伴い、従来の履修上の制約（学年別の配列など）は原則的にすべて廃止するという抜本的改革がなされます。SFCでのこうした改革は、関係筋に再び大きな反響を呼ぶことになるでしょう。

岡部研究会の履修者数は増加、活動幅も拡大

岡部研究会の研究テーマは、一つは金融関係、もう一つは日本経済であり、引き続き二つの領域をカバーしています。二つの研究会に共通しているのは、情報通信における技術革新がもたらす影響とそれに関する政策含意を基本的視点としていることです。履修希望者数は、幸いにも近年増加し、このところ毎学期それぞれ約十五名（私が望ましいと考える上限の人数）となっています。

研究会の運営に際しては、一方で最新の論文や書物の輪読を行い、他方では履修者各自によるリサーチペーパー（研究論文）を毎学期1編作成してもらうという点では、従来の方式を踏襲しています。しかし、研究成果を高めるうえで新しい点を幾つか導入しています。

第一に、各自のリサーチペーパーの発表は、一九九九年度春学期以降、研究報告会議というかたちをとって毎学期二日間にわたる合宿形式で時間をかけて行なうようになったことです（これまでに湘南国際村や町田市で実施）。第二に、履修者各自が執筆したリサーチペーパーについては、その「概要」部分を取りだして毎学期『研究論文「概要」集』という一冊の刊行物として公刊していることです。この冊子は、当初は研究会の自主的な印刷物にとどまっていたが、一九九九年度春学期以降は湘南藤沢学会の正式刊行物に認定され、同学会から刊行されるようになりました。

第三に、履修者のリサーチペーパーのなかには、日本各地の研究者から反響をもらうまでになったことです。リサーチペーパーのなかで最も優れた論文は「研究会優秀論文」として湘南藤沢学会から学期毎に刊行されていますが、その数はすでに累計二十七編にも達する一方、それらはすべてインターネット上でも公開しているために、幸いにもこのように評価されるようになったわけです（これらの論文は岡部研究会のホームページを参照してください。<http://web.sfc.keio.ac.jp/~okabe/>）。

この間、経済学部の池尾和人ゼミとのインターゼミも、毎年十二月に行っており、当研究会が持つネットワークとして一つの大きな資産になっています。

岡部研究会にとって、今年最大のニュース（むしろ発足以来最大の歴史的ニュースというべきかも知れません）は、かつてこの研究会に所属していた諸君（OB・OG）の本格的な再会（リユニオン）が初めて実現したことでしょう。この会合は、織田崇信君（一九九七年三月卒業）と山内賢太郎君（二〇〇一年三月卒業）が中心になって発案・企画・実行をしてくれたものであり、さる十一月二十五日に横浜市（イタリア

ン・レストラン)において開催されました。

この会合には、OBのほか現履修者も加えて合計三十四名もの諸君が集う大盛会となりました。参加したOB諸君にとっては、単に旧知に再会する機会であるというにとどまらず、岡部研履修者という共通項を持つ新しい知己を獲得する有意義な会合となったようです。むろん、私としても、本当にうれしいそして楽しい会合でした。このようなつながりは、一朝一夕にできあがるものではなく、相互の信頼と努力によって形成されるものです。こうした関係は、今後とも大切にしていきたいと考えています。

研究成果や大学論の書物を刊行

私自身についていうと、SFCあるいは義塾全体に関係する各種委員会などの仕事が一層増え、また学部長(鶴野公郎教授)が海外出張されている時には学部長の代行を務めたりするなど、ますます多忙になりました。ただ、多用な中でも幸い健康を維持でき、研究・教育面での活動もそれなりに継続できています。

まず、昨年出版した二冊の書物「現代金融の基礎理論」および「環境変化と日本の金融」(ともに日本評論社)を基礎とした論文により、さる三月、SFCの教員としては初めてSFC大学院から学位(政策・メディア博士)を得ることができました。また、今年度は日本金融学会や日本経済学会で報告する機会があったほか、七月には豪州シドニーで隔年開催されている日本経済研究会議にも出席しました。一方、研究活動と直接の関係はありませんが、一〇月には「大学教育とSFC」という書物(随筆集)を刊行しました。

私の担当してきた授業は、前述したようなカリキュラムの大幅改正に伴って多少の変更があり、二一年度以降はマクロ経済1、地域研究論B、金融経済論、経済政策分析(新規設置科目。学部および大学院の共通科目)の四つとなる予定です。なお、二一年四月以降は、在外研究の機会が与えられることが決定しており、二一年度の前半は英国(オックスフォード大学)に、そして後半は米国(ミネソタ大学)にそれぞれ滞在して研究活動を行う予定です(このため、二一年度の一年間は研究会を含め授業は休講となります)。

すでに卒業された皆さんにおかれては、健康に留意され、それぞれの職場あるいは大学院で一層ご活躍されるよう祈ります。そして在校生の諸君におかれては、今後の残された学生時代の日々を悔いのないよう、懸命に勉強されるよう期待しています。

(岡部研究会歴代メンバー名簿・会報の序文、二一年十二月)